



しあわせのシippo

shia wase . no . shippo

水橋文美江

著者紹介

水橋文美江（みずはし ふみえ）

1964年石川県生まれ。'82年上京。フジテレビのヤングシナリオ大賞で最終審査に残る。フジテレビの『東京ストーリーズ・おろしたての夫婦生活』で脚本家デビュー。'97年第5回橋田壽賀子賞新人賞受賞。

しあわせのシッポ

2002年7月10日 第1刷

著者	みずはし 水橋文美江
発行者	小澤源太郎
発行所	株式会社 青春出版社

東京都新宿区若松町12番1号☎162-0056

振替番号 00190-7-98602

編集部 03(3203)5123
電話 営業部 03(3207)1916

印刷 堀内印刷 製本 ナショナル製本

万一、落丁、乱丁がありました節は、お取りかえします。

ISBN4-413-02148-7 C0093

© Fumie Mizuhashi 2002 Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写(コピー)することは 著作権法上認められている場合を除き、禁じられています。

しあわせのシッポ

shiaわせ.no.shippo

水橋文美江

目次
あしあわせの
シッポ

第1章 “最期の日々”のはじまり 7

第2章 近くて遠い二人 3¹

第3章 私の隣に…… 5⁰

第4章 朝帰り 74

第5章 新しい恋 96

第6章 ある異変 118

第7章 もう一度一緒に 140

第8章 傷ついても 162

第9章 雨の日の記憶 184

第10章 気づいたときには…… 206

第11章 ほんの少し先の未来 228

第12章 “父親”からの卒業 250

この物語は『しあわせのシッポ』のシナリオを元に小説化したものです。
小説化にあたり、内容に変更と創作が加えられていることをご了承ください。

第1章 “最期の日々”のはじまり

明るい午後の陽射しを浴びて、バスケット部の生徒たちがジョギングに向かう。若々しいかけ声で校門を出て行く列の先頭は、顧問の女教師、松井美桜^{みお}だ。

二十七歳、すらりと伸びた全身に生氣がみなぎって、光る髪が風になびいている。

きりつと意志的な顔だちは小気味よく引きしまって、まっすぐな視線がさわやかで自立的な印象を与える。

美桜はこの女子高でも人気の的で、帰宅途中の生徒たちに「先生さよなら！」と口々に声をかけられている。

校庭の桜は今が満開——。美桜の姿もはつらつとした生氣に満ちて、今まさに花の季節に輝いているかのようだ。だがそんな美桜にも、人生の陰りがないわけではない。両親の愛に満ちた家庭に守られて、ここまできた美桜ではなかった。

美桜が生徒たちを引きつれて走っているその時間——ちよつと太めの中年男の指が、美



桜のマンションのロビーで部屋の番号を押そうとしている。そのことを、美桜は知らない。

男は何回もボタンを押しかけてはためらい、ついに諦めたのかトボトボと歩き始めた。

男は電車に乗り、下町風の商店街へとやってきた。男が立ち止まって見上げたのは、「竹屋酒店」と書かれた看板。折から配達を終えた主人が、店へ戻ってきたところだ。店の奥の茶の間では、ワンパクざかりの男の子二人がプロレスごっこ真つ最中。叱っているそばからガラスが割れる騒ぎで、妻の綾子は逃げる息子たちを追いかけて店を飛び出して行ってしまった。

呆れて見送っているのは、ちよつとトボけた表情の主人、竹屋喜好。一見、気が弱そうにも見えるが、どこか皮肉のきいたおかしみも感じられる人物だ。

喜好は店先に、実に久しく会わなかった男が立っているのを見て、驚いてさらにポカンとしてしまった。中年のその男、松井八朗は喜好の従兄弟に当たる。

久しぶりに見る八朗は、かなりくたびれて見えた。シワっぽいコート、長く床屋へ行っていないようなボサボサの髪、不精髭。大柄な体つきに茫洋とした表情は相変わらずだったが、もう五十歳を越えているはずの八朗に、やはり年月の変化は否定できない。

特別いい男というでもないが、ユーモラスな笑顔と愛すべき人柄は魅力があり、喜好が知っていた三十代の頃はやる気満々の商社マンだった。しかし今は、さすがに表情にも

肌にもあの頃の男ざかりの精気は感じられなくなっている。

親類の間ではよく言われない問題の人だが、ともかく珍しく姿を見せたのだ。喜好は歓待し、八朗はその夜、子供たちの声も賑やかな家で一泊の世話を受けた。

それにしても八朗が、今になってふいに顔を出したのはなぜだろう。口の重い八朗から、喜好が聞き出した訪問の目的は、娘の美桜に会いたくなったということだった。

実は八朗は、美桜のもとを去って二十年になる。親類の間では、八朗は妻子を捨てた男以外の何者でもない。それが、美桜の母の苦労のもとになったことは確かだ。女手で美桜を育て上げたその母親も、二年前にこの世を去ってしまった。

そんな八朗も年のせいでは心境の変化でもあったのか、今になって娘に会いたくなったらしい。喜好に言うところによると、今さらどの面下げて、との思いがあつて、どうしても美桜の部屋の番号が押せなかった。だから喜好に、後押ししてほしいというのだった。

「いいよ、わかった！ そっか、父と娘の二十年ぶりのご対面かあ！」

喜好はオーケーしながら、思いがけない刺激的な出来事にワクワクしている。

翌日、二人はつれ立って美桜のマンションへ向かったが、途中、神社で八朗の足はひとりで鳥居をくぐって本殿に向かっていた。

娘との再会がうまくいくことを祈るのか、神妙な顔で柏手かしわでを打ち、頭を下げている。

「でもなあ、多分ダメだろうなあ。きつと追いつ返されるよ」

喜好は面白がつて水をさし、なぜかひとりでに顔がニヤけてくるのだ。

「そうかなあ。顔くらいは見てくれるだろ。お父さんなんだから」

「いいや、きつと門前払いで顔も見たくないって言われるね。えっ、お父さん？」「そうだよ、美桜。会いたかった！」「私もよ、お父さん！」「なんて、あり得ないよ。二十年前に妻子を捨てて香港へ逃げて行った男だよー？」

言われた八朗は一瞬つまつたが、「逃げたんじゃない、仕事だよ」と言い返した。

「仕事ねー。家庭より仕事を選んだ。つまんない話、週刊誌の見出しにもならないよ」

「錦糸町のホステスと駆け落ちしたのは、見出しになるか」

八朗が切り返したので、喜好は答えられなくてモゴモゴしている。

「あんときは大変だったな。泣かれるわ、コワイお兄さんは出てくるわ。ま、いいさ。若わか気の至りつてやつだろ」

喜好にも、どうやら言われたくない過去はあるらしい。喜好は口調を改めて言った。

「ハチさん……。美桜ちゃんはハチさんを恨んでるよ。二十年間、ずっと恨み続けてきたはずだ。そうに決まってるよ」

八朗は愕然として「そうなの？」と真顔になる。すると嗜好はまたもとの調子が出てきて、これからの劇的再会に興味津々の顔になった。

「おい、おい、なんでおまえはそんなに楽しそうなの？ 再会がうまくいかないこと、面白がつてるだろ！ 人の不幸を喜んでるだろ！」

スキップするような嗜好の後を、八朗は追いかけて行く。おかしな二人だった。

その日、勤務を終えた美桜は、いつものように近くのコンビニで買い物をした。

春たけなわで、ずいぶん日も長くなった。冬の間は夕食のものを買うとあたりが真っ暗で寒々としていたが、今は空気も暖かく夕暮れの色はゆるやかに空を染め始めている。

夕月を見上げながら、美桜はコンビニの袋を下げていつもの道をマンションへ向かった。帰っても、誰が待っているわけでもない。母がいた頃は、何も考えずに家への道を歩いたものだ。母の顔と温かい食卓が待っているのは当たり前のことと、美桜は楽しく「ただいま！」と入って行けばよかった。亡くなって一人になってはじめて、母の存在がどんなに自分を支えてくれたかがわかる。

微妙に暮れなずむ空の色がきれいだ。美桜は小さい頃から、よく母親の買い物について行く子供だった。夕暮れの道を、二人で帰ってくるのも大好きだった。空、きれいだね、

と見上げて言える母がそばにいただけでよかった。

美桜は、一人でゆつくりと歩く。そんな帰り道、母親が言った言葉が思い出された。

『人は誰でも、目に見えるものばかり追っかけるのね。でも本当に大切なのは、目に見えないもののなの。誰でもみんな持つてゐるのに、気がつかないでいるもの。しつかりつかないないといふと、スルリと逃げてしまうものよ。何だと思う？ それはね、＼しあわせのシッポよ。美桜もちゃんとつかんでいないとね』

聞いたときは、よくわからなかった。私のそばにも、つかんでいなきや逃げてしまふしあわせのシッポがあるのだろうか？ もしかして、母は逃がしてしまったからこんなことを言うのだろうか？ スルリと……。そんなことを思つて美桜は母を見上げていたものだ。

一方、八朗は、はたして娘が受け入れてくれるかとドキドキしていた。やたら嬉しそうに喜ばにつれられてマンションに着いたのは、美桜が帰宅した直後のことだ。

『俺が先に入った方がいいんじゃないかな。』なーんだ、喜ばおじさんか、何の用？』つて自然に入った方がいいんじゃない？』

『いや、やっぱり俺が自分で押す。おまえが自然に入るとは思えない』

ロビーのインターフォンを誰が押すかで二人はモメている。喜ばにまかせておいたら、

とても「さりげなく」は会えそうもない。芝居のような再会を期待されても迷惑だ。

後ろに何かのセールスマンが順番を待っていたが、二人がどかないので先にインターフオンを押してしまった。

室内にいた美桜がモニター画面を見ると、セールスマンが出て鼻をスースーさせる器具か何かを売り込み始めた。美桜は「あ、結構です」と言ったがセールスマンがねばったので、「ほんと、結構ですから!」と切ってしまった。そのそっけない声に、八朗はまた元気をなくしそうだ。

「ああいう感じで、ハチさんも追い返されるんだろうなあ」

喜好が言ったので、さらに八朗はしぼんでロビーの外へ出てきてしまった。

まず一服して、落ちつく——そう思って玄関前でタバコをくわえたが、いくらポケットを探してもライターがない。あちこち探っていると、「ほらよつと」とマッチが目の前に飛んできて、八朗はナイスキャッチで受け取った。

タイミングよく放ってくれたのは、ちょうど玄関前にバイクを止めた若い男だ。ヘルメットをはずした一瞬の印象は、よく日焼けして体格のいいワイルド系、どこか不敵なカッコいい奴。ものおじしない目が憎めない気楽さでこっちを見ている。

マッチを見た八朗は、その派手なデザインに気をとられた。ヌードとハートマークつき



で、「セクシーパブ・エロエロ」とある。それにしても、ひどいネーミング。男が言った。

「それ、うちの店の」

「うちの店って？ あなたが経営なさってる？」

「まさか。バイトだよ、呼び込みの。そーゆーの、表で配ってる」

「ああ、そうですか。『エロエロ』ね、こりゃどうも」

八朗はそのマッチをありがたく頂戴してタバコに火をつけた。

「ウサ晴らしするには持つてこいだよ。九十分五千円ポッキリ、飲み放題のお触り自由」

八朗は「自由？」と聞き、若者は「自由」とうなづく。男同士で、思わず顔が笑った。

それから八朗はもう一度チャレンジしようとロビーに入ったが、先に美桜の部屋番号を押したのはマッチをくれたあの若者だ。

八朗と喜好は顔を見合わせたが、若者はすぐにオートロックを解除され、慣れた様子で中に入って行った。二人も一緒にめぐり込もうとしたが、間に合わなくて思いきりガラスにぶつかり、八朗は鼻血まで出す始末。どうもドジでうまくいかないのだ。

部屋へ上がり、「ヨッ」と互いに慣れた挨拶を交わし合ったこの男、名前は赤木陸（りく）という。美桜と同じ二十七歳で、子供の頃からの友達だ。

陸が食事はすませたと言うので、美桜は食べかけていたコンビニのお弁当をまた食べ始め、陸は勝手はわかってる様子でコーヒーのお湯をわかし始めた。

「今日は何？ 何かあったから来たんでしょ？ 何もなかったら来ないんだから」

美桜が聞くと、用があったのは凶星らしく陸は言った。

「あいつの誕生日だったんだけど……俺そういうの疎いから忘れててさあ……」

陸の用件は、その外見にも似ずたわいなく可愛い話だった。誕生日が二週間も過ぎてからやっと思いい出して、プレゼントは買ったものの今からじゃサマにもならないし、美桜から彼女に渡しといてくれないか、と。

「ダメよ。ちゃんと自分で渡して、ちゃんと謝って、ちゃんと仲直りしなさいよ」

「メールでも送っとくよ」

「そういうの嫌がるじゃない、しょうこ 笙子ちゃんは……」

と言ってから、美桜は何か気を使う様子で少し言い方を変えた。

「笙子ちゃんの場合……そういうの嫌がるって知ってるでしょ？ 直接会いに行くのよ」

陸はまだためらっていたが、美桜に言われてそうする気になったようだ。

そこへチャイムが鳴って、美桜はモニターを見に立ち上がりかけた。

「また訪問販売だよ、きつと。さっきも来たんだ、断ったのに」